

平成 18 年度学位授与
博 士 学 位 論 文

内容の要旨および審査結果の要旨

沖縄県立看護大学

大学院

保健看護学研究科

はしがき

本書は、学位規則(昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号)第 8 条の規定により、平成 18 年度に博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨の公表を目的として収録したものである。

目次

頁

1. 高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究…………… 1
—宮古出身者の地域文化行動を通して—

氏名 下地 敏洋

2. 保健師の仕事の「よりどころのゆれ」についての一考察……………5
—沖縄県および市町村保健師を対象とした質問紙調査(2006)から—

氏名 知念 真樹

氏 名 下地 敏洋

学位の種類 看護学博士

学位記の番号 甲 第1号

学位授与の日付 平成19年3月10日

学位論文題目 高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究
—宮古出身者の地域文化行動を通して—

論文審査委員

主査 沖縄県立看護大学教授 神里みどり

副査 沖縄県立看護大学教授 上田礼子

副査 沖縄県立看護大学教授 栗栖瑛子

学位論文の内容の要旨

1. 緒言

我が国は、超高齢社会に向かい、高齢者ケアのあり方が社会的課題としてクローズアップされてきた。また、生活環境の変化や人生の背景、及び価値観の多様化に伴い、高齢者個々人の持つケアニーズも多様なものとなっている。

本研究において、地域文化行動を「特定の地域で共有されている言語や生活様式」と操作的に定義し、その構成要素は、①方言で会話すること、②地域に住むこと、③地域の伝統行事に参加すること、④地域行事に参加すること、とした。

本研究の獨創性は、①情報化・グローバル化、物質的豊かさが進展する社会の中で、考え方、暮らし方、生き方に生涯をとおして影響を与え続ける地域文化行動に焦点を当てること、②老年期に生きる高齢者の体験から実証的に高齢者の地域文化行動が個々の幸福感に及ぼす影響要因を明らかにすることである。

以上のことから、本研究の目的を、高齢者の地域文化行動がその幸福感に及ぼす影響要因を明らかにすることとした。

2. 研究方法

1) 対象：地域文化行動に特徴がある沖縄県宮古島市に在住する高齢者（宮古対象者）100人と宮古島出身で浦添市に在住する高齢者（浦添対象者）97人であった。対象の条件は、①地域に住んでいること、②自立していること、③地域行事や伝統行事に参加していること、とした。

2) 調査項目：基本属性と地域文化行動に関するものとし、質問は半構成的なものとした。基本属性は、①性、②年齢、③世帯構成、④配偶者の出身地、⑤教育歴などであった。地域文化行動に関する半構成の質問項目（12項目）は、①友人と話す機会、②友人と方言を話す機会、③地域行事への参加、④伝統行事への参加、⑤生活で嬉しかったこと、⑥これまでの人生で苦労したこと、⑦宮古島以外の場所で生活したいか、⑧これからの生活で期待すること、⑨これからの生活で心配なこと、⑩人生をやり直すとしたらどんなところを変えるか、⑪人生で自慢できること、⑫宮古島の歴史や文化で誇りにできること、であった。また、浦添在住者には、質問項目⑦「宮古島以外の場所で生活したいか」を、「宮古島に戻りたいか」に変えて実施した。

3) 調査方法：面接と聞き取り調査と留め置き調査で3回実施した。第1回は、基本属性と地域文化行動に関する半構成の質問項目による面接聞き取り調査、第2回は小田の幸福感尺度の質問紙を用いた留め置き調査であった。第3回は、高齢者の地域文化行動と幸福感（幸せ・健康）との関係を直接聞く半構成の質問項目による面接聞き取り調査である。

調査は、対象者が指定した場所で実施し、第1回と第2回の調査期間は宮古対象者が平成18年7月、浦添対象者が平成18年8月～9月、第3回は平成18年9月～10月であった。

4) 分析方法：第1回調査は、質問項目の回答内容から、対象者が述べた地域文化行動を行う多様な理由を取り出し、調査の回答内容を原文のまま記述し、類似した内容を集め(小分類)、研究の目的である高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響要因を明らかにするという研究の趣旨に照らして分類(大分類)、命名し、幸福感の影響要因を推測した。第2回調査は、小田の幸福感尺度を点数化し、合計して総合得点化し、第1回調査の大分類との関係をみた。第3回目は、質問8項目のそれぞれについて、第1回目と同じ手順で分析し、語られた影響要因を導いた。

3. 結果

1) 高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼすと推測された共通する影響要因

- ①「友人と方言で話すこと」は《慣れた言葉で伝え合える》《宮古の言葉のよさを感じる》《コミュニケーションを楽しめる》《なじみを感じられる》であった。
- ②「宮古に住むこと」は、《愛着・生まれ島》《住みやすい》《のどかで優しい》《子・子孫がいる》《友人・近隣とのソーシャルネットワークがあって楽しい》《一生ここで暮らしたい》《年なのでどうしようもない》《ゆれる心》、浦添在住者では、《生まれた島に帰りたい》《宮古が良い》《家族がいる》であった。
- ③「伝統行事に参加すること」は、《祈願》《交流》《義務》であった。
- ④「地域行事に参加すること」は、《楽しむ・和む》《役割がある》《健康》《義務》《皆が集まる》《情報や連絡がある時》であった。

2) 地域文化行動が高齢者の幸福感に及ぼす語られた影響要因

- ①「友人と方言で話すこと」は、《慣れた言葉で伝え合える》、《宮古の言葉のよさを感じる》、《親しみを感じる》、《安心・気持ちよよい》であった。
- ②「宮古に住むこと」は、《愛着・生まれ島》、《安心》、《友人・近隣のソーシャルネットワークがあって楽しい》、《子・孫がいる》、《住みやすい》であった。
- ③「伝統行事に参加すること」は、《祈願》、《健康を祈る》、《みんなで楽しい・嬉しい・皆と会って楽しむ》、《伝統行事への貢献・役割がある》であった。
- ④「地域行事に参加すること」は、《交流》《健康のため・健康につながっている》であった。

3) 高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響要因

- ①「友人と方言で話すこと」は、《年寄り同士昔を話せる》、《慣れた言葉で伝え合える》、《コミュニケーションを楽しめる》、《宮古の言葉の良さを感じる》、《同郷の心であたためることができる》、《親しみを感じる》、《癒される》、《安心》、《笑う》、《元気が出る》、《健康の話ができる》、《地域文化をつくる》であった。
- ②「宮古に住むこと」は、《揺れる心》、《年なのでどうしようもない》、《愛着・生まれ島》、《友人・近隣とのソーシャルネットワークがあって楽しい》、《子・孫がいる》、《気楽な対人交流が多い》、《安心》、《のどかで優しい》、《住みやすい》、《笑う》、《島でとれたものを食べる》、《運動》、《生活がある》、《することがある》、《住み遂げる》、《一生ここで暮らしたい》であった。
- ③「伝統行事に参加すること」は、《交流が楽しい》、《祈願》、《心の拠り所》、《心の健康》、《安心》、《健康を祈る》、《からだの健康》、《健康の確認》、《義務・役割》、《多様な人生を感じることができる》であった。
- ④「地域行事に参加すること」は、《交流》、《近くだから》、《爽快》、《健康につながる・幸福感につながる》、《笑う》、《元気のもと》、《楽しい・和む》、《義務・役割》、《人間を拓げる》であった。

4. 考察

- 1) 高齢者の4つの地域文化行動による幸福感への影響要因をまとめると、地域文化行動がもたらす交流という行為に関わり、コミュニケーションの活性化とともに、人的ネットワークのよさを感じ、安心して地域文化行動を楽しむという快い感情を得ている影響要因もある。いずれの地域文化行動にもそれ

ぞれ高齢者が担う役割があり、高齢者に参加への義務を感じさせ、役割を再方向づける影響要因を内包している。

- 2) 老年期の自己実現・統合をめざす課題に、①老化に伴う身体的変化に対する対応、②新しい役割や活動へのエネルギーの再方向づけ、③自分の人生の受容、がある。地域文化行動から《安心》感が高まり、《役割を果たす》ことから、精神的な安らぎ・満足感・成就感を得ることが、人生の受容につながり、交流は統合という人生の最終段階にある発達課題達成の影響要因になっている。
- 3) 高齢者の幸福感の向上を目的とする看護方法の開発には、高齢者の地域文化行動や生涯発達の視点を加えることが重要だと考える。地域文化行動を取り入れることは、従来の機能向上をめざすだけの看護方法ではなく、本研究の対象者たちによって語られた《笑う》、《爽快》、《元気のもと》、《役割がある》に繋がり、大規模な健康増進が図られると考える。具体的方法として、同じ地域文化を持つ者同士が交流する、療養室やユニット等の工夫が挙げられる。
- 4) 超高齢社会における生涯教育では、地域文化を共に生きる力と交流する力を育むことが求められ、そのことを可能とする社会システムの構築が課題となる。本研究で、高齢者の地域文化行動と幸福感への影響要因はいずれも老年期の発達課題と関係づけることができた。その影響要因を幸福感に結びつけるには、支援もさることながら、老年期までに養って来た高齢者自身の能力も大きい。そこで、老年期の幸福感と発達課題の達成という視点から、培うべく基礎的能力は、〈楽しい〉や〈安心〉であるといえる。
- 5) 本研究は地域文化行動を通して高齢者の人生の統合をどう支援するのか、超高齢社会に生きる子ども達のライフステージにおける生涯発達をどう支援するのかを問う、極めて実践的な研究である。
- 6) 本研究の限界と今後の課題として、今回は宮古出身者を対象として、地域文化行動が高齢者の幸福感に与える影響要因を明らかにしたが、必ずしも宮古特有のものではないと考えられる。今後、他の地域で、多くの影響要因が見いだされる可能性も大である。どのようなものが見いだされ、どのように看護や教育のシステム、地域文化行動の要素を発展させることに役立つのか、その成果を見定める研究が必要である。

5. 結論

- 1) 本研究では、高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響要因を多数見いだすことができた。そのいずれも高齢者の発達課題である「老化に伴う身体的変化に対する対応」、「新しい役割や活動へのエネルギーの再方向づけ」、「自分の人生の受容」との関連が見いだされた。
- 2) 高齢者の幸福感を支援する看護方法への活用や地域文化を生きる高齢者の発達課題も視野に入れたケアを検討することの重要性が示唆された。
- 3) 超高齢社会を生き抜くために、生涯にわたる教育の中で地域文化を感じ、様々な人々と心を通わせ、ともに生きる能力を育成することの必要性が明確にされた。

論文審査の要旨

研究者は、1988年に米国の大学院の修士課程において、「高齢者の幸福感をいかに高めるか」という研究テーマに取り組み、実際に異文化の中で生活している日系一世の施設入所者のケアを通して、文化的背景を考慮したケアの重要性について明らかにした。本研究ではその研究を踏まえた上で、地域文化行動が実際に幸福感に影響している様相を宮古出身者に焦点をあて調査を実施したものである。これまで地域文化行動と幸福感との関連性について焦点をあてた研究は皆無であったため、本研究テーマに着眼した点において、老年看護学や高齢者ケアにとって独創性に富んだ研究論文である。

1. 研究の特に優れた点

1) 文献レビュー

国内外の高齢者の幸福感に関する先行研究、関連文献を幅広く検討し、地域文化行動と幸福感を関連づけた先行研究が皆無の状況の中で、地域特性や文化の概念定義の文献レビューを通して、地域文化行動の操作的定義を導き出してきたことは、老年看護領域における学術的発展性に貢献しているといえる。

2) 研究課題の設定および方法の独自性

地域文化行動を4つの視点（方言、地域に住むこと、伝統行事、地域行事）からとらえ、それと高齢者の幸福感への多様な影響要因を見いだすために、2つの異なる地域の中で宮古出身者という多数の高齢者（197名）を対象にして面接調査を実施したことは研究目的を達成する上で妥当な方法だといえる。さらに、本研究者が宮古出身者であったがゆえに、調査協力が得られてきた経緯があり、調査者が複数に及んだ面接調査の一貫性という点では今後検討の余地はあるが、本論文の結論を導き出す上で貴重なデータ収集ができたといえる。

3) 保健看護学への貢献度について

本研究の知見は、高齢者のみでなく超高齢社会に生きていく次世代の者に対する生涯発達支援も含めた看護活動、学校教育、超高齢社会のシステム構築に寄与できる実践的な応用可能性を秘めた研究である。

2. 論文審査会において検討を要する主な点

- 1) 宮古出身者に限定された高齢者であるため副題をつける必要がある。
- 2) 方法論、特に対象者の選定方法やプレテストを通して、本調査を実施する研究方法のプロセスが明瞭に記述されていないのでこれらを明記する必要がある。
- 3) 地域文化行動の4つの視点のうち、伝統行事や地域行事への参加の程度や頻度との関連は明確でないので考察や研究の限界で言及する。
- 4) 量的データの検定に関して、データの分布状況に応じた適切な方法で検定を行う必要がある。

これらの指摘はいずれも論文の追加・修正により改善された。

(最終試験結果の要旨)

看護職以外の背景をもつ著者が看護学の博士課程コースを修了するためには、看護職の背景を持つ学生より、3科目以上の科目履修の義務があり、さらに看護専門用語を含めてかなり努力をして全科目の履修を行ってきた。その科目履修のプロセスで、幅広い知識を得たことが本研究を進めていく上で強い動機付けになった。この研究テーマを通して、老年保健看護に関する専門的知識とこの領域における新たな挑戦を要する課題をみつけ今後の教育研究に寄与できる能力、技法、態度を修得できた。

以上より、申請者は、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。

氏 名 知念 真樹

学位の種類 看護学博士

学位記の番号 甲 第2号

学位授与の日付 平成19年3月10日

学位論文題目 保健師の仕事の「よりどころのゆれ」についての一考察
—沖縄県および市町村保健師を対象とした質問紙調査(2006)から—

論文審査委員

主査 沖縄県立看護大学教授 池田明子

副査 沖縄県立看護大学教授 前田和子

副査 沖縄県立看護大学教授 宮地文子

学位論文の内容の要旨

1. 緒言

近年、保健師を取り巻く環境はめまぐるしく変化してきている。平成9年の地域保健法の全面施行により、県と市町村の役割が明確になった。それに伴い、県保健師はこれまで直接住民サービスを行っていた立場から一転して、保健所機能強化のために従来よりも広い視点に立ったコーディネーターの立場で仕事をするようになった。また、組織的にも保健所と福祉事務所が統合し、それに伴い保健師も従来の一課集中から各課各分野へ配置され、それぞれの部署でその専門性を発揮することになり、業務内容及び組織や勤務体制の大きな変化への適応を迫られている。

一方、市町村においても、保健師の活動分野が福祉分野等へも拡大したことに伴い、配属先や役割の多様化が生じている。さらに、昨今の行財政改革、地方分権の推進、市町村合併等を背景とした地方自治体そのものの改革が行われ、小さな政府をめざしてアウトソーシングが促進されており、保健サービスを担ってきた市町村保健師の存在意義や活動の方向性が見えにくくなっている。

また、沖縄県は戦後約半世紀にわたり、県保健婦が市町村に駐在して業務をおこなう保健婦駐在制というシステムが存在したが、平成9年の地域保健法施行に伴い廃止された。

このような社会の変化に伴い、保健師に期待される役割も大きく変わってきており、保健師の「仕事のよりどころ」もゆらいでいることが推察される。

そこで本研究では、沖縄県内に勤務する保健師の職場環境、離職の意向、仕事満足度、理想の保健師タイプ、「仕事のよりどころ」を把握し、「仕事のよりどころ」と理想の保健師タイプとのギャップおよび「仕事のよりどころ」のバラツキから「よりどころのゆれ」をとらえることを試みた。

2. 用語の操作的定義

1) 「仕事のよりどころ」

本研究では、就職や異動、転職、離職など、人生を左右する仕事の大きな転機にぶつかったときに判断の一番の決め手となった考え方を「仕事のよりどころ」と操作的に定義する。

「仕事のよりどころ」を把握するための質問紙作成にあたり、Schein E(1990).の「キャリア・アンカー」の概念をもとに8つの選択枝を設定したが、本研究では、経験の浅い保健師や新人も対象に含めており、Schein の定義するキャリア・アンカーと区別するために、「仕事のよりどころ」という用語を用いた。

2) 「仕事のよりどころ」と理想の保健師タイプのギャップ

本研究では、理想の保健師タイプと「仕事のよりどころ」が一致するものを「仕事のよりどころ」と理想の保健師タイプの<ギャップがない>、異なるものを<ギャップがある>と操作的に定義する。

3) 「仕事のよりどころ」のバラツキ

質問紙調査で自分の人生を左右する仕事の大きな転機にぶつかったとき、判断の決めてとなった考え方(判断のよりどころ)を8つの選択枝から複数回答で求めた。その結果を中央値によりバラツキの多い群と少ない群の2群に分割した。

4) 「よりどころのゆれ」

理想の保健師タイプとのギャップと「仕事のよりどころ」のバラツキから「よりどころのゆれ」を定義し、ギャップの有無とバラツキの多少の組み合わせにより、下表の様に4パターンに分類した。

	ギャップあり	ギャップなし
バラツキ多い	ゆれ(+, +)	ゆれ(-, +)
バラツキ少ない	ゆれ(+, -)	ゆれ(-, -)

3. 研究方法

1) 調査方法; 自記式質問紙調査

2) 対象: 沖縄県及び県内市町村に勤務する全保健師(404人)

3) 調査期間: 2006年5月29日～6月10日

4) 質問紙の配布及び回収方法: 郵送法

5) 倫理的配慮: 個人のプライバシー保護のため、質問紙調査は無記名で実施した。調査に際し、調査用紙に趣旨説明文を添付し、調査用紙の返信をもって調査に同意したものとみなした。

6) 統計解析方法: 統計解析を行う際、ソフトウェアは、SPSS for Windows(ver.10.0J)を使用し、ノンパラメトリック検定、平均値の差の検定を行った。

7) 調査項目: 「よりどころのゆれ」に関係すると考えられる要因を調査項目として下記のように選定した。

(1) 個人属性: 年齢、性別、婚姻状況、出身地、勤務年数、職歴離島・へき地の経験年数など

(2) 組織に関する要因: 勤務先、所属部署、上司の職種、保健師数、昇進の機会など

(3) アサーション度: 平木典子の「アサーション・トレーニング」を参考に、基本的アサーション権に基づく5つの質問項目を作成した。

(4) 仕事満足度: 仕事満足度の測定スケールとしては、Ellenbecker による Home Healthcare Nurses' Job Satisfaction Scale (HHNJS)を日本の保健師に併せて内容を改変して使用した。

(5) 支援システム: 相談できる人の有無、サポートシステムの有無と必要性

(6) コンピューターや携帯電話の活用状況

(7) 5年以内の離職の意向

(8) 「仕事のよりどころ」: Schein.Eの8つのキャリア・アンカーを参考に質問項目を作成した

(9) 理想の保健師タイプ: Schein.Eの8つのキャリア・アンカーを参考に質問項目を作成した。

4. 結果

1) 回収率; 61.9% 勤務先別回収率; 県(65.8%) 市(63.3%) 町(44.0%) 村(43.5%) 特定町村(79.4%)

2) 「よりどころのゆれ」パターンの分布は、ゆれ(-,-)14.7%、ゆれ(+,-)19.8%、ゆれ(-,+)17.9%、ゆれ(+,+)47.6%の割合であり、理想の保健師タイプとのギャップと「仕事のよりどころ」のバラツキが大きい群が半数近くを占めていた。

3) 「よりどころのゆれ」パターンを「仕事のよりどころ」別にみると、[専門分野]を選択した群でゆれが大きく、[ライフスタイル]群と[地域貢献]群ではゆれが小さい傾向が見られた。また、仕事満足度との関連では、「よりどころのゆれ」の小さい群(-,-)の満足度が相対的に低く、ゆれの大きい群(+,+)の満足度が高かった。「よりどころのゆれ」パターンとの保健師の勤務先、年齢、性別、必要とされる支援システム等とは統計学的な関連はみられなかった。

4) 「よりどころのゆれ」パターンの特徴は下表のとおりであった。

ゆれ(-,-)群	<p>理想の保健師タイプとのギャップがなく、「仕事のよりどころ」のバラツキも少ないパターン 全体の14.7%を占める</p> <p>他の年代に比べて相対的に30代が多い</p> <p>他のパターンに比べ[ライフスタイル]を「仕事のよりどころ」として選んでいたものが多い。 支援システムで『行政・管理研修システム』があがっていた。</p> <p>仕事満足度が最も低い</p>
ゆれ(+,-)群	<p>理想の保健師タイプとのギャップはあるが、「仕事のよりどころ」のバラツキが少ないパターン 全体の19.8%を占める</p> <p>県と市に多くみられ、町・村や特定町村では少ない。</p> <p>他のパターンに比べ[専門分野]をよりどころとして選んでいるものが多い</p> <p>5年以内の自主離職予定が少ない</p>
ゆれ(-,+)群	<p>理想の保健師タイプとのギャップはないが、「仕事のよりどころ」のバラツキが多いパターン 全体の17.9%を占める</p> <p>他のパターンに比べ、相対的に男性の占める割合が多い</p> <p>他のパターンに比べ[ライフスタイル]または[住民貢献]をよりどころとして選んでいるものが多い</p> <p>仕事満足度が最も高い</p>
ゆれ(+,+)群	<p>理想の保健師タイプとのギャップがあり、「仕事のよりどころ」のバラツキも多いパターン 全体の47.6%を占める</p> <p>各年齢がだいたい同じ割合で存在している</p> <p>他のパターンに比べ[専門分野]をよりどころとして選んでいるものが多い</p> <p>仕事満足度の平均が'ゆれ'(-,+)に次いで高い</p>

5) 必要とされる支援システムは、「よりどころのゆれ」パターンや勤務先等に関係なく、“事業内容・閲覧システム” “カウンセリングシステム” “インターネット相談システム”が上位にあがっていた。

5. 考察

1) 「よりどころのゆれ」パターンの特徴について

- (1) ゆれ(-,-)に属する保健師は、自分のライフスタイルと仕事とのバランスを重視しているため、「よりどころのゆれ」は少ないが、仕事には必ずしも十分に取組めずに満足度が低くなっていると考えられた。
- (2) ゆれ(+,-)に属する保健師は、理想と現実のギャップはあるが、実際に仕事で何をすべきかを捉えているため、「仕事のよりどころ」として[専門分野]を選択していることが示唆された。
- (3) ゆれ(-,+)に属する保健師は、理想とよりどころが一致しており、「仕事のよりどころ」の判断の巾が広いことを示している。

尾崎は、「ゆらぎ」とは、物事の基礎、システム、あるいは人の判断、感情などが動揺し、葛藤する事態であると定義する一方で、「ゆらぎ」を変化・成長・再生の契機ととらえ、「ゆらぎ」には、もともと「ゆらぐ」ことができる余地や幅が不可欠であると述べている。また、「ゆらぎ」に向き合い、多面的に吟味することで、「ゆらぎ」にいたずらに翻弄されずそれを活用していくためのしなやかな軸を育てることができると結んでいる。

本研究で「よりどころのゆれ」をとらえるための「仕事のよりどころ」のバラツキを、尾崎のくゆらぐことができる

余地や幅>と捉え、理想の保健師タイプとのギャップを<ゆらぎの軸になる部分>と捉えると、軸がぶれず、ゆらぎの幅のある ゆれ(-,+)に属する保健師は、自分のなかの「ゆらぎ」ときちんと向き合っている群と考えられた。

(4) ゆれ(+,+)に属する保健師は、理想と現実にギャップがあり、そのことが判断の基準となるよりどころを見えにくくしており、その結果多くの考え方からよりどころを模索しているのではないかと考えられた。また、このパターンには対象の半数が含まれること、パターン内の年齢構成も調査回答者と差がないことから、本調査対象者の現状を反映していることが示唆された。

2) 「よりどころのゆれ」パターンと仕事満足度との関連について

ゆれの大きな群の仕事満足度が相対的に高かったことから、自分が「ゆれている」ことに向き合い、めまぐるしい変化に前向きに適応しようとしていることが満足度を高めているのではないかと考える。要するに、「仕事のよりどころ」が「ゆれる」ということは、決してマイナス要因ではなく、むしろ、自分が「ゆれている」という事実と向き合い、それを多面的に吟味することで、自分のキャリアを振り返り深めていくチャンスになると考えられた。

6. 結論

調査対象者の約半数を占めていた「よりどころのゆれ」パターン(ゆれ(+,+))の特徴は、理想と現実にギャップがあつて「仕事のよりどころ」のバラツキも大きいのが、幅広い判断基準を「仕事のよりどころ」としており、仕事満足度は比較的高かった。また、仕事満足度が最も高かった「よりどころのゆれ」パターン(ゆれ(-,+))の特徴は、理想と現実にギャップがなく、「仕事のよりどころ」のバラツキは大きいのが、自分の中のゆらぎと向き合い変化に対応できていると考えられた。

本研究は、保健師のおかれている不安定な現状を「よりどころのゆれ」として把握し、これを前向きに支援する方向性を示すことにより、変革期における保健師のキャリア開発に貢献できると考える。

論文審査の要旨

本研究は、沖縄県の保健師のおかれている現状を踏まえて、研究計画の段階では、離島・へき地町村の保健師の離職の要因と職務満足度との関連を明らかにすることを目的とした。しかし、先行研究の検討などを進める中で、離職という限られた現象のみにとらわれることなく、保健師が仕事を継続する上で拠り所になっているもの、仕事の転機に判断の決め手となった考え方を「仕事のよりどころ」と操作的に定義し、この「仕事のよりどころ」のゆれを捉えることによって、現在の保健師のおかれている不安定な状況を分析することを試みた。

1 本研究の特に優れた点は以下の通りである。

1) 文献レビュー

看護職の離職、職務満足に関する文献から看護職のキャリア・サイクル、キャリア発達等に関する50編以上の引用文献を検討し、特に概念枠組みの作成に有効に活用している。

2) 研究課題の設定及び方法の獨創性

ユニークな概念枠組みから用語を操作的に定義し、「仕事のよりどころ」のバラツキと理想像とのギャップを組み合わせて「よりどころのゆれ」を捉える試みは非常に獨創的である。

3) 保健看護学への貢献

本研究から得られた示唆は、沖縄県の保健師が直面している問題解決の一助となるのみでなく、広く保健師の継続教育やキャリア開発にも活用できるものであり、保健看護学の実践の向上に資するものである。

2 審査の結果、本研究の改善点は以下の通りである。

1) 用語の操作的定義について

提出論文の操作的定義は“ゆらぎ”という表現であったが、他の学問分野の用語と区別しにくいとの指摘があり、「よりどころのゆれ」という表現に修正した。

2) 概念枠組みについて

概念図が解りにくいとの指摘があり、文献レビューとの関連性を明示し、説明を加えた。

3) 「仕事のよりどころ」のバラツキを捉えるカッティングポイントについて

中央値がカッティングポイントとして妥当であることをヒストグラムで図示した。

上記の点について加筆・修正された本論文は、保健看護の実践に大きく寄与するものであり保健看護学の発展に貢献できると評価された。

(最終試験結果の要旨)

本研究の文献レビューを通して専門領域の学識を豊にすることができ、今後さらに学習を深めることが期待できる。ただし、調査データの処理方法に関しては、妥当性の検討等の指摘もあり、統計学的手法についてもさらに学習を深める必要性が確認された。

以上、最終試験の結果、本論文は看護学博士の学位を授与するに値するものであり、申請者は、看護学における研究活動を自立して行うのに必要な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。

博士学位論文
平成 20 年 3 月発行

発行・編集
沖縄県立看護大学・大学院保健看護学研究科
〒902-0076 沖縄県那覇市与儀 1-24-1
TEL: 098-833-8800

